



私の歩んだ道

上出 良一*

皮膚科入局まで

高校(当時、金沢大学教育学部附属高校)の国語の教師がユニークな方で、夏休みの宿題に自叙伝を書くようにと言われた。20年後のクラス会のときにそれが返されるのであるが、タイムカプセルのようなもので、何を書いたかまったく覚えておらず、気恥ずかしく読み返した。内容の特徴は繰り返し「運良く」が出てくることで、家族に笑われてしまった。

曰く、北陸線の線路で遊んでいて、汽車にひかれそうになったが、「運良く」保線区の人に助けってもらったとか、中学の入学試験の最中に緊張のあまりトイレに行く羽目になったが、「運良く」合格したとか…。まあ、その後もほぼほぼ「運良く」過ごしてきたようである。

実家は祖父の代から開業医で、父が東京慈恵会医科大学(以下、慈恵医大)卒だったので、とりあえずそこだけ受験したら「運良く」合格した。上京する前に家族で壮行会を催してくれ、その席で回ってきた寄せ書きに、「三代目は任せとけ」と書いてしまった。当時の心境に偽りはないが、結局実家の医院を継ぐことにはならなかった。

大学受験は母親と上京したが、試験が終わって母親を上野発の夜行列車に乗せて見送った後、直ちに上野駅近くのピンク映画館に入った。大人への第一歩であったが、何の因果かその後都

内をいろいろ転居した後、現在は根津に住んでいて、しょっちゅうその映画館の前を通る羽目になった。ただ、つい最近一帯の再開発が始まり、上野公園内の世界遺産、国立西洋美術館とともに残るはずであった、わが青春の遺産は「運悪く」取り壊されてしまった。

慈恵医大を卒業し、当時はすぐ入局という時代であった。地元へ帰り金沢大学へ入局ということも選択肢としてあったが、当面東京で勉強したいということで、慈恵医大皮膚科に入局した。その最大の理由はアレルギーに興味があり、パッチテスト、アトピー性皮膚炎などに造詣の深い故笹川正二教授が2年前に就任されていたので、ぜひ教をを請いたいと考えたからである。入局と同時に学生時代から付き合っていた東京の人と結婚した。

笹川教授からは同期で入局した本田まり子先生たちとともに直々に病理の見方などを教えていただいた。ただ残念ながら以前からいた先生方には古い医局体質が漂っていて、あまり一生懸命勉強する雰囲気ではなかった。1年経ったときに自分では覚えていないが、「この医局でもう学ぶことはない」と、妻に言い放ったようで、極めてとんがっていたのだろう。当時創設されてまだ新しい形成外科で2年目の研修をしたいと申し出た。当時の皮膚科は外科から転向された先生が多く、たとえばアテローム手術や生検も大きな弾機の針に通した絹糸でざっくり縫うので、創は開くは、癒痕は汚いほど、これ

* Kamide, Ryouichi ひふのクリニック人形町(〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-2-3 アライヴ人形町3階)

ではまずいと思ったことも大きい。また、植皮術をぜひマスターしたい、これからは皮膚科でも手術をしないとますます領域が狭くなるだろうという危機感もあった。

皮膚外科を始める

当時は2年間のストレート研修が普通だったので、医局長からはとんでもないと反対されたが、笹川教授が形成外科の丸毛英二教授と掛け合ってくださり、2年目は形成外科で過ごすこととなった。新しい医局なので、症例検討会も熱がこもっており、自分も気合が入った。形成外科でdermostichを置く縫合法を学び、念願の植皮術や小皮弁も教えていただいた。皮膚科に戻ることがわかっている者に懇切丁寧に教えていただき、ありがたかった。3年目は皮膚科に戻り助手となり、症例があれば無謀にも術者として手術を始めた。まだまだ未熟で皮弁が壊死に陥った症例では、形成外科の先輩に再手術をしていただいたりして、今でも大変感謝している。

当時は今ほど医療安全ということが厳しく言われておらず、卒後3年目のペエペエが全麻手術をしても咎められない時代であった。ただ、更衣室で「なんで皮膚科の医者がいるんだ」といわれたこともあったが、その後、手術が上手な新村真人先生が助教授として就任され、Recklinghausen病の手術の助手などでさらに手術症例を重ねていった。その頃から、わが国の皮膚外科の隆盛が始まり、メラノーマ、Paget病などの症例も増え、報告して学会で学ぶことも多かった。形成外科での研修が後々までキャリア形成のきっかけとなっている。

現在、くりぬき法として頻用されている粉瘤の手術法も、「私の工夫」として、『皮膚科の臨床』誌に投稿したものであるが、簡単に行えてきれいに治ることで患者さんの評判もよい。レーザー治療機器も長らく病院に申請していたが、初めて保健収載されたときに、「運良く」馬主協会からの寄付金が病院に入り、形成外科と共同でレーザー治療センターを設立することができた。



著者近影

アトピー性皮膚炎専門外来

皮膚外科と並行して卒後3年目から学位取得のための研究を始めた。笹川教授のご専門であったアトピー性皮膚炎に関する一連の研究が既に行われていたので、小生は当時急速に発展していたHLAについて、疾患との関連を調べることを願い出た。よかろうということで東京大学や製薬会社の研究室で基本的なことを教えていただき、あとは荒れ放題だった慈恵医大の研究室を片付けながら、アトピー性皮膚炎専門外来で採血し、リンパ球を分離してHLAのA,B,C locus(当時調べられたのはこれのみ)について検討した。あまり明確な結果は出なかったが、学位をいただくことができた。アトピー性皮膚炎はその後も自分の専門領域の一つとして診療を続けている。

アメリカ留学

学位を取得した後さらに何かやりたくて、笹川教授に海外留学させていただきたいと申し出た。皮膚科医局に前例はなかったが、よかろうということでご自身が留学されたニューヨーク大学を紹介いただいた(図1)。当時はLangerhans細胞がなんらかの免疫学的役割を担っているのではないかということが、ようやくわかってきた時期で、論文を読むとニューヨーク大学皮膚科で研究をしているので、それをテーマにしたいと思っていた。

1981年8月、当時3歳と6歳の子供を連れて一



図1 1981年，ニューヨーク大学にて。向かって右から新村真人先生，Kopf先生，三原一郎先生，Gigli先生，小生。

家4人で渡米した。行ってみたらLangerhans細胞を研究していた先生は既に辞めており，研究はGigli教授の研究室が引き継いでいた。彼女は補体が専門であったが，トピックとして紫外線照射でLangerhans細胞が皮膚から消失するという報告があったので，モルモットの皮膚にステロイドやレチノイドを塗布して，Langerhans細胞の密度がどう変化するかなどを同僚とともに研究した。

留学1年目の終わりのころ，Gigli教授がカリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)の主任教授として赴任することを伝えられた。いろいろ考えた末，心機一転，西海岸へ行くことに決めた。折角の機会ということで，無謀にもショートワゴンに家財道具一切を詰め込み，幌馬車隊よろしく一家四人で大陸横断することにした。Gigli教授に「9月1日にはラボに顔を出します」とだけ告げて，8月最初にニュージャージーを発った。ひたすら走り，イエローストーン，グランドキャニオンなどの国立公園では2～3泊し，途中ロッキーマウンテンの中を走るSL列車なども楽しんで(実は鉄ちゃんです)，東海岸から西海岸へ1カ月の大陸横断を「運良く」無事終えることができた。

UCSDではポルフィリンの光毒性反応に関与するメディエーターについて動物実験を主に行った。サンフランシスコで開催されたSID meetingで初めて発表した，途中でKodakのスライドプロジェクターが突然動かなくなった。エンジニアが「Projector has broken!」と言ったので，すかさず「My heart is broken!」と返したら大うけして，その後は緊張も和らいでなんとか終えることができた。夕食にGigli教授が慰労を兼ねて寿司屋へ連れて行ってくれたが，緊張による遅発性胃痛であまり楽しめなかったことが思い出される。

東海岸と違い明るく開放的なサンディエゴでは，家族ものんびりと過ごすことができた。暇があれば近くの海岸でバーベキューを楽しんだ。今，上背部に多発している花卉状色素沈着はその名残である。アメリカ留学は自分と家族にとって研究，生活の両面で大変チャレンジングな2年間であったが，得たものは大きかった。Gigli研究室の同僚Henry W. Limはその後，光皮膚科学のリーダーとして活躍し，次期AAD presidentである。日本語を話す変な皮膚科医としてサンディエゴで出会ったSteven D. Emmet

はその後、慈恵医大へ留学し、アメリカに帰った後も家族ぐるみの付き合いをしている。

光皮膚科学を修める

1983年、留学から帰国し、今後のテーマを何にしようかと考えたとき、これからの時代は「光」だと直感し、大した知識もなく、また教室内には誰も専門家がいなくてもかかわらず、勝手に光線過敏症専門外来を立ち上げた。手探りでやっているうちにいろいろな患者さんを紹介いただいて、多数の光線過敏症症例で最少紅斑量測定、誘発テスト、光パッチテストなど、今から思えば本当に手間暇のかかる検査を後輩達とよくやったものだと思う。何せゼロスタートなので、光皮膚科学の勉強は教科書、論文を読むだけでなく、学会などの折に他学の諸先輩から細かく教えていただいた。多形日光疹・日光蕁麻疹の統計的観察、ピロキシカム・ニューキノロン・ケトプロフェン・ヒドロクロロチアジドなどによる薬剤性光線過敏症の症例集積、骨髄性プロトポルフィリン症の多数例の集計、慢性光線性皮膚炎の海外との共同臨床研究、色素性乾皮症の共同研究など、光線過敏症専門外来で検討を加えた症例を逐次発表した。光線過敏症以外の光皮膚科学領域では、日焼けサロンによる皮膚傷害の調査を行い、紫外線防御、光老化などについて一般への啓発に努めた。

心身医学に目覚める

ある学会の帰途、新幹線の中で既に開業していた1年後輩の細谷律子先生から「先生、患者さんの話をよく聴いてあげると患者さんが泣き出すのよ」ということを聞いた。「まさか」とそのときは信じなかったが、患者が抱えるいわゆるストレスについての「傾聴」が患者の涙のきっかけであることに気がついたのは、恥ずかしながらかなり後のことであった。

そのような気づきの後、皮膚科心身医学研究会に参加するようになった。同研究会は1986年に故岡部俊一先生が創設されたが、亡くなられた後、有志が引き継いできた。しかし、皮膚科



図2 1999年、第98回日本皮膚科学会総会、特別講演演者、臨床心理学者、河合隼雄先生と共に。

領域での心身医学のさらなる普及のために、有志が協力して全国に声掛けし、2011年に日本皮膚科心身医学会を設立し、初代理事長に推挙された。現在は女子医大の檜垣祐子教授が理事長で、第116回日本皮膚科学会総会でも教育講演2コマを担当するまでになった。

アトピー性皮膚炎の診療では傾聴が重要である。その延長上で、白衣なしで患者さんと話し合う会を慈恵医大で1995年以来続けてきた。開業後もクリニックの待合室を使って「アトピーカフェ」という形で月1回日曜日に開催している。大変ではあるがやりがいのある活動である。

「穴」にはまる

ある日、慈恵医大外科の元教授穴澤貞夫先生から、ストーマケアの会があるので、WOCナースたちにスキンケアの話をしてくれないかと誘われた。ストーマという「穴」にはまるきっかけであった。その後、WOCナースと一緒にストーマ患者を診ることになった。真菌検査や、ストーマ周囲に生じるポリープ状の腸上皮化生を炭酸ガスレーザーで蒸散するのが主な仕事であったが、WOCナース、患者さん両方から大変喜ばれた。

その頃、厚生労働省からのお達しで褥瘡対策チーム設置が未実施減算という形で強制された。急遽院内に委員会が設置され委員長に選ばれた。褥瘡潰瘍の「穴」にもはまってしまったが、褥瘡

回診でいろいろ経験を積んだことが、その後の日本褥瘡学会でのキャリア形成や、創傷治療の熟達に役立った。また、頑張るWOCナースと知り合いになり、今でもいろいろ頼まれ、なかなか「穴」から抜けられない。

恩師との出会い

恩師の新村真人教授(現 名誉教授)には、スカイクラブやUVABClubへ推薦していただき、多くのすぐれた先生方の知己を得ることができた。また、新村教授は日本皮膚科学会総会(図2)、日本研究皮膚科学会、日中・日韓皮膚科学会など多数の学会の会頭をされたので、事務局長として微力ながらお手伝いさせていただいた。そのおかげで他学や海外の先生方と交流でき、その後の大切な財産となった。また、何度も海外の学会へ連れて行っていただき、行き当たりばったりにやっけてもなんとかなる新村流の旅行の楽しみ方も大いに学ばせてもらった。Recklinghausen病の巨大神経線維腫の手術や、毎週の症例検討会など、新村先生の下で多くのことを学びながら大学時代を過ごせたのは、自分のキャリア形成のなかで最も運が良かったことと思う。

開業医として再出発

大学の定年を半年後に控えたころ、退職後は開業医として自分が理想とする診療にチャレンジしたいと考えはじめた。父は91歳まで皮膚科診療所をやっていたが、小生が当初の約束を破り、跡を継がなかったため廃院となっていた。幼いころから父の背中をみて育ったせいか、根底に開業医魂が潜んでいたのだろう。さすがに91歳まで現役は無理とは思ったが、開業コンサルタントとともに準備を始めた。クリニックは住まいから30分以内で考えていたが、「運良く」日本橋区人形町に気に入った物件が見つかった。2014年3月末日に退職し、5月12日新規開業へ向けてばたばた準備した。

実は専業主婦として苦楽をともにしてきた妻は、定年の8年前にくも膜下出血で突然亡くなっ

た。あまりにも急な出来事で神隠しにあったような気持ちであった。その後、「運良く」現在の妻と出会い再婚した。亡き妻の命日と、新しい妻の誕生日が同じ日とわかり、驚いたが、毎年その日はちょっと複雑な心境である。今の妻はばりばりの銀行支店長で、開業時につきものの金銭的なやりくりでは大変心強かった。今でも労務、財務など経営全体について何かと相談に乗ってくれ、その辺に疎い小生としては大変感謝している。

開業するにあたっては、「皮膚を通じて患者さんに寄り添う」をモットーに掲げた。心身医学的なアプローチを基本に、とくにアトピー性皮膚炎患者さんの診療には時間と気持ちを傾けている。光皮膚科学のキャリアを生かし、紫外線照射装置の全身型とターゲット型を設置した。光線過敏を訴えて退院される方も多く、系統的問診票と簡単な自己照射試験法を考案し、多形日光疹、日光蕁麻疹などの日常的光線過敏症の診断のスピードアップに努めている。粉瘤のくりぬき法はホームページに写真入りで掲載したおかげで、予想以上に患者さんのおみえになる。悪性腫瘍をはじめ時間のかかる手術や細かい検査、緊急を要する患者は、幸い周囲に母校をはじめ、よく存じ上げている先生がおいでになる大病院がひしめいているので紹介する上で大変ありがたい。

現在、母校ともう一校からレジデント1年目の若い先生を派遣していただいている。大学の初診室のように一緒に診る形で、大学の外来では学べない日常的皮膚疾患への対応をしっかり学んでもらおうという目論見である。若い先生からいろいろ話が聞けるのも刺激になる。また、檜垣教授にも半日来ていただいて、心身医学的なアプローチが必要な患者さんの診察で、クリニックの質向上に貢献していただいている。

開業して2年半になろうとしているが、本年10月に法人化し、今後とも自分が理想とするクリニックを目指していきたい。大学で経験してきた皮膚外科、アトピー性皮膚炎、心身医学、光医学が最後に「運良く」収束し、『三代目』にとって大きな力になっている。